氏　　名：中野　真理子
学 位 の 種 類 ：博士（看護学）
学 位 記 番 号 ：甲第 231 号
学位授与年月日：2022 年 9 月 20 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文審査委員 ：主査　小林　京子（聖路加国際大学教授）
副査　林　　直子（聖路加国際大学教授）
副査　奥山　絢子（聖路加国際大学教授）
副査　加藤　俊介（順天堂大学大学院医学研究科教授）

論 文 題 目：進行膵臓がん患者に対する看護師主導の早期からの専門的緩和ケアプログラムの実装研究

博士論文審査結果

1．論文の概要

本論文は、大学病院で化学療法を受ける膵臓がん患者への EBI に基づいた看護師主導の Palliative Care Team (PCT)介入プログラムを実装し、PCT 介入の臨床と実装アウトカムの評価を目的とした実装研究である。診断後 8 週間以内の進行膵臓がん患者の疼痛・身体症状の軽減と QOL の向上、組織の緩和ケアの質改善を臨床アウトカムとし、定期的な問診票での評価とアセスメントシートを用いた面談、病棟・化学療法室医師とのカンファレンス、勉強会が実施された。進行膵臓がん患者 12 人への介入がされ、プログラム開始時、1、2、3 ヶ月時点臨床アウトカムが収集された。PDCA のサイクルを 1 ヶ月として患者によって 3～4 サイクルとなった。介入患者の QOL は介入 1 ヶ月に上昇、3 ヶ月に低下傾向、疼痛・身体症状は介入 2 ヶ月、3 ヶ月とも上昇した。他方、満足度は高いままであった。実装アウトカムでは、化学療法室看護師のカンファレンス参加率は QI サイクル 2 で低下、サイクル 3 で上昇した。問診票の記載率は 90%、アセスメントシートを用いた面談の実施率は 53～94%とばらつきが見られた。インタビューではプログラムへの看護師の評価では「患者の安心につながる」「症状悪化時の関わりがスムーズになる」などがあがった。

PCT 介入プログラムの臨床アウトカムとしての QOL、身体症状、簡易版生活のしやすさ問診票による全人的苦痛をクリニカルアウトカムとしていたが、統計的に有意な変化は示されなかったが、早期から PCT の看護師が関わることで終末期ケアの話し合いや終末期ケアに関わる意思決定が促進される可能性が推測され、本プログラムを実施していた患者に PCT の看護師の関わりを継続し、終末期に希望や価値にそった過ごした方であったかなどを追跡していくことの重要性が示された。また、本プログラムの実施により、新規の膵臓がん患者に対

するPCT看護師による介入要請が定着し、実装を通じて看護師の緩和ケアへの意識の向上と積極的にPCTにつなげる意識の醸成が図られた。

2．評価できる点

一貫して看護師主導の介入に力点を置いた看護研究であった。臨床のニーズを捉え緩和ケアを必要とする進行膵臓がん患者の緩和ケアにフォーカスして研究がなされ、がん看護専門看護師としての臨床に裏付けられた研究であった。結果を分析していく中で、臨床アウトカムである患者のQOLが病状の進行に従って低下していくことを捉え、本介入プログラムによってもたらされる効果が患者と支援する医療スタッフ間の信頼関係の発展や、長期的な見通しを伴った安心感であることを捉えるに至り、看護介入の効果が介入時点の短期的アウトカムだけでなく、長期的に効果をもたらすことの知見となった。また、組織的な実装の取り組みは、チームを構成する人員のキャリアに合わせた役割付与の重要性を示唆し、これからの組織改革の手がかりを与えた。

3．課題点と修正についての評価

審査においては、対象基準・除外基準、リクルートの方法、対照群の位置付けの明確な記述、結果において患者の満足度、チームのプログラム受容性のインタビューの結果の追記、考察にキャリアを持つスタッフのプログラムへの巻き込みと役割付与の方略、これらを踏まえた今後の展望の追記が指摘された。

これらの指摘に対し、8月29に提出された論文において適切な修正がなされたことを審査委員全員が確認した。

以上により、本論文は本学学位規程第5条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。